

研究課題 (テーマ)	日本語名	中近世の日本とイタリアにおける仮面喜劇の生成発展と現代的実践について
	英語名	The Establishment and Development of Masked Comedy in Japan and in Italy during the Medieval and Early Modern Period and its Cotemporary Practice
研究開始年	2012年4月 ～ 2015年3月 (3カ年)	
研究スタッフ (11名)	<ul style="list-style-type: none"> ■ 桃山学院大学より、和栗珠里准教授 (代表者) ほか計6名 ■ ヴェネツィア・カ・フォスカリ大学より、ルペルティ・ボナベントゥーラ教授 ■ 小笠原匡、アンジェロ・クロッチェほか、芸能関係より計4名 	
研究の対象とする国・地域	日本、イタリア(とくにヴェネツィア)	
研究の目的・特色 <p>日本とヨーロッパの歴史には、多くの点で興味深い符合が見られる。中近世における仮面喜劇の生成発展もそのひとつである。すなわち、日本の狂言とイタリア・フランスで隆盛をみたコンメディア・デッラルテがそれである。両者の比較研究は、過去にも18世紀イタリアの喜劇作家ゴールドーニを軸として行なわれたことがあるが、本プロジェクトは、次の2つの点において、従来日本でもイタリアでも全く見られなかった新しい取り組みを企画する。</p> <p>まず、コンメディア・デッラルテの全盛期である近世後期だけでなく、その成立期にあたる中世末期から近世初期のイタリアに注目し、同様に中世末期に成立した狂言との社会文化史的な比較を試みる点である。</p> <p>第二に、現代において狂言およびコンメディア・デッラルテの上演と両者のコラボレーションを行なっている役者に参加してもらうことにより、両者が持つ本源的かつ普遍的な文化的価値を実践面から探らうとする点である。</p> <p>そして、これらの取り組みを通して、多様な劇作的要素が社会にもたらす影響についても検証できればと考えている。</p>		
研究プログラム (計画・スケジュール) <p>各研究スタッフの専門分野を活かしながら、日本とイタリアの両国における研究史と現代における実践状況を学術的に整理する。</p> <p>日本およびイタリアにおいて、文献学的な史料データ収集を行なう。</p> <p>本学およびヴェネツィア・カ・フォスカリ大学において、狂言とコンメディア・デッラルテのコラボレーション・ワークショップを開き、実践を通じた新たな視点の掘り起しを探るとともに、両大学および一般の広範な参加者からの提言を募る。</p> <p>以上の成果をまとめ発表する。</p>		
共同研究の内容および効果 <p>本プロジェクトは、2010年度に発足した本学 (桃山学院大学) とヴェネツィア・カ・フォスカリ大学との国際交流および2012年度に予定されている和泉流狂言師小笠原匡氏の本学客員教授就任を契機として発案されたものである。本学にはイタリア中近世史関係の研究スタッフやジャパニーズ・スタディーズおよびアジア文化の専門家がそろっており、本プロジェクトを遂行するのにまさしく理想的な条件が揃っている。日本とイタリアの伝統文化の比較研究に本プロジェクトがもたらす成果は、この条件のもとでのみ可能となりうる独自性の強いものになるはずである。</p> <p>さらに、小笠原氏は2012年度の本学の授業で狂言についての講義を行なってくれる予定であり、また、本学のイタリア語では語劇を通じた身体感覚をとまなう言語学習を二年次に取り入れているので、本プロジェクトの成果は教育面にも反映していくことができるだろう。</p>		